

室町末期における地方の大和猿楽

天野文雄

観世宗節の駿府徳川氏、宝生大夫の小田原北條氏など、室町末期には大和猿楽四座の大夫が有力大名を頼って地方に長期滞留している。これ以前にも観阿弥の駿河下向（今川氏の招きによるか）をはじめ禪竹の西国・北国

下向（西国は大内氏の縁）、明応頃の金剛大夫の播磨下向（赤松氏の縁）、文明頃の宝生大夫の中国下向（大内氏の縁）といった例があり、上下（旅興行）は四座の大夫たちの常とするところであった。応仁の乱以降の京洛の荒廢はその傾向に拍車をかけたはずで、観世宗節や宝生大夫の事例はその典型だが、その実態を示す資料は意外に少ない。ここでは管見に入った信州諏訪と武州八王子の二資料を示して、ささやかだがその空白を埋めるようすがとしたい。

その一は『諏訪史料叢書』所収の「神使御頭之日記」に見える記事である。同書は享祿元年（一五三三）から天文二十三年（一五五四）に至る諏訪上社の神長官守矢氏の私記であるが、そこに次のような記事が見出せる。

〔天文七年〕

此年六月コンカウ太夫下宮ニテ法楽、五番。関東下下。

〔天文八年〕

此年六月ホウシャウ太夫下宮ノ法楽、七番。関東へ通。

〔天文九年〕

此年今春太夫八月廿八日ニ下、九月一日ニ宮ニテ法楽、七番。大祝殿馬太刀、同頼重馬太刀、又五願ノ祝衆モ太刀出候。是ハ先代ナキ例ニ候間、色々口惜由頼重へ申候へ共、ツイニムリニ太刀ヲ被為出候。

すなわち、天文七年から三年連続で金剛大夫、宝生大夫、金春大夫が諏訪社で法楽能（役者の発意による奉納能）を演じたことを伝える記事だが、三年連続というところに当時の大和猿楽の頻繁な「上下」が窺われる。

延文元年（一三五〇）成立の『諏訪大明神絵詞』には同社祭祀に猿楽が推参したことが記されて著名だが、この三例はもちろんそれとは無関係である。金剛大夫と宝生大夫については演能後関東に向ったと記されているように、

両大夫の目的地は諏訪ではなかった。下社は中山道沿いに鎮座しており、両大夫は中山道經由で関東に赴く途中で下社に立ち寄ったのであろう。

さて、天文七年の金剛大夫は後年若宮祭で金春八郎牛蓮と席次争いを演じたことで知られる鼻金剛（天正頃没）である。『証如上人日記』天文七年二月十日条に「晩景、金剛大夫阪東へ下候為「暇乞」来候」とある記事がこの諏訪社での法楽能に対応しよう。鼻金剛はこの年の三月十六日に江州坂本で勧進能を催している（『親後日記』）から、関東下向はこの勧進能以後であろう。『証如上人日記』天文十年十一月二十三日条に金剛大夫が甲斐から上ったことを伝えるが、その間に在国していた可能性も高い。天文八年の宝生大夫は観世宗節の弟（観世道見の子）で、この年三月以前に宝生大夫となっていた小宝生（天正四年以前没）らしい。『四座役者目録』は「小宝生ハ小田原北條殿懸ニテ下り、小田原ニテ小宝生ハ卒シタルト也」と伝えるが、小宝生のこの時の目的地が小田原だった可能性は高からう。天文九年の金春大夫は八郎喜勝（牛蓮）である（天正十年没、八十歳）。喜勝はこの年の一月から三月の間に七郎氏照（宗瑞）から金春大夫を継承したと考えられるから、これは大夫就任直後の下向だったことになる。

喜勝のこの下向に關係すると思われる記事が『証如上人日記』天文十年十二月二十六日条に見えている。

金春大夫八郎為歳暮之礼是、今度自関東上洛之間、土産之心也。来。如去々年。二百疋是、今度自関東上洛之間、土産之心也。到来。萬取乱、百疋宛遣之。

すなわち、喜勝が歳暮の礼に本願寺の証如の許に参上し、関東より上洛の土産として二百疋を献上したことを伝える記事であるが、この関東下向と前年天文九年の喜勝の諏訪での法楽能はひと続きのものである可能性が高いであろう。「去々年の如し」とあるのは、この年同様天文八年の暮に喜勝が中風を煩った父氏照の代理で参上したことを指していると考えられるが、証如が前年の天文九年を飛ばして一昨年のことを持ち出しているのも、天文九年の暮は喜勝が関東下向中であつたことを示唆していよう。鼻金剛もそうだったが、この頃の地方下向は相当長期にわたることが多かったようだ。

ところで、「神使御頭之日記」によると、喜勝の演能に対しておほほほ大祝諏訪頼重らは溢る神長官らを強引に説き伏せて喜勝に太刀や馬を与えているが、これは「口惜」と無念がる神長官の口吻ともども猿楽への下行をめぐるやりとりとしてはなほだ異常と言うべきである。当時、諏訪氏は甲斐の武田信虎と対立し

ていたが、この年の十一月に諏訪頼重は信虎の娘を迎え、一時的な和陸状態にあつた（頼重は天文十一年に信玄によって滅ぼされる）。一方、武田氏には天文十五年以前から金春庶流の大藏大夫が身を寄せている（『甲陽軍鑑』など）。喜勝はこの時、下社から上社へと足をのばしているが、それは甲府への道筋でもある。これらを総合すると、この折の喜勝の目的地は武田氏のものであり、前例のない頼重による大奮発とそれに対する神長官らの抵抗は対武田戦略をめぐる内部対立とみなせるのではなからうか。この記事の直後に信虎娘との婚儀のことが記されているが、喜勝への引出物をめぐる対立はそれと一連の記事と把握できそうである。この推測が当たつていれば、金春大夫も武田氏と関わりがあつたことになり、それが大藏大夫を介しての縁であれば、大藏大夫と武田氏の縁も天文九年以前に遡ることになるが、前述のように鼻金剛も武田氏を頼つていたらしいことを参照するとその蓋然性はかなり高いと思われる。

さて、もう一つの資料は、観世座の笛役者として名高い笛彦兵衛（天文年間まで活躍）の息子で、やはり彦兵衛を名乗つていた笛役者の事蹟についての資料である。この彦兵衛は永祿七年の観世宗節による相国寺石橋勸進能に出演しているが、その後は北條氏を頼つて

いたらしく、『当代記』によると天正十八年の秀吉の八王子城攻撃で大黒なる名笛を道づれに討死したとされる。しかるに、『八王子市史』『新編武蔵国風土記稿』『桑都日記統編』などに収められているこの折の戦死者（北條方）の過去帳（相即寺・大善寺の二種）に「笛彦兵衛清範」の名が見える。『当代記』の所伝を裏づける資料で、清範なる名は新知見に属する。なお、『八王子市史』は「彦兵衛のことは多くの逸話がのこされている」として「北條五代記」をあげるが、同書はまだ閲覧の機を得ていない。（大阪大学文学部助教）